講演抄録

明治期館山の殖産興業をみる

～小原金治の経済人ネットワーク

NPO法人安房文化遺産フォーラム代表
愛沢　伸雄氏

明治期に県議や衆院議員を務めた小原金治（1859―1939）は安房銀行（千葉銀行の前身）や房総遠洋漁業の設立、経営に関わるなど、安房の殖産興業をたどるうえでの重要人物。生涯については資料に乏しく不明な点が多いが、最近館山市南条の生家から自筆の『自叙伝草稿』の断片が発見された。

金治は豪農の長男として生まれ、自由民権の嵐が吹き荒れていた20代の時、北条村で何回か開催されていた民権派の演説会に参加。東京からの弁士小野梓や田口卯吉、地元若手の満井武平らの熱弁を見聞し、政界を志したと思われる。

上京し漢学塾、夜学の法律学校で学ぶが、3年後に父が重病になり帰郷。民権派の地元演説会で弁士となり、25歳で南条村会議員に選ばれる。

無法状態にあった房州白土の採掘と土地問題に取り組み、県や国に働きかけて住民との契約関係を結んだ「安房坑業会社」を立ち上げる。この白土会社は「東洋煙草大王」の異名をもつ岩谷松平が社長に、地元からは金治自らが取締役に就任した。最近、源慶院からこの会社と契約を結んだ吉田智道住職の証書が見つかっている。

岩谷は松岡村出身の福原有信とともに東京・銀座で活躍していた経済人で、後に東京選出の衆院議員になっている。全国的な商社の岩谷商会と関わり、金治は「初めて実業を学んだ」と書いている。

金治の身近にいた親しい政治家は、館野村出身の県議で安房汽船会社を創設した小原謹一郎。また盟友となった満井武平を通じ、彼の叔父の富崎村長、神田吉右衛門とも交流があった。

1890（明治23）年、金治と満井はともに県議に当選。二人は力を合わせ安房の殖産興業に取り組んでいく。94年の第4回衆院選では大隈重信の知己を得て、改進党から立候補し当選した。

3年間の議員活動では、神田や満井らの水産業改革を応援。関澤明清が館山で取り組む先駆的な遠洋漁業を奨励する法律にも関わった。また、正木貞蔵らによる公的な海運事業「安房団体」を援助した。

水産振興へ安房銀行を設立
政・官・経済界の人脈駆使し

水産業の振興には安定的な海運業の支えが不可欠だが、当時の海運業は資金調達面で課題を抱えていた。金治は金融機関の設立が急務だと安房郡長の吉田謹爾に相談。安房出身である大物大蔵官僚、曽根静夫国債局長にも働きかけたとみられる。三者の連携をてこに、安房ゆかりの企業人福原有信や浅田正文、川崎財閥の総帥川崎八右衛門らを発起人とし、96（明治29）年に安房銀行が設立された。

翌年に関澤が志半ばで急逝。関澤の実弟鏑木余三男は遺志を継ぎ、本格的な漁業会社創設を呼びかける。98（明治31）年に安房銀行の資金や国からの遠洋漁業奨励金が投入され、北洋のオットセイ・ラッコ猟を主とする房総遠洋漁業が設立。議員を辞していた金治が社長に就任した。

小原金治の人的ネットワークに連なる富崎村長、神田吉右衛門は数多くの遭難漁民の救済や鮪延縄船改良といった施策をはじめ、鮑組合の収益を教育などの公共事業に投じて人びとに敬愛された。また資生堂の創業者、福原有信は帝国生命保険（現在の朝日生命）設立にも参画し、後に社長に就任。吉田らの呼びかけで、遭難者家族救済のための保険事業に関わっている。

神田らも全国に先駆けて遭難者救助積立金制度や布良同盟保険をつくり、帝国生命と連携した取り組みを行っている。

これらの動きは地元の人々に貯金を奨励するきっかけとなっていく。当時はまだ不安定だった金融業の中で、地域密着型の安房銀行は比較的強固な経営基盤を築くことに成功。地域振興の支えになったことを忘れてはならないであろう。

（本稿は館山市菜の花ホールで7月27日に行われた安房歴史文化研究会公開講座の内容を要約、再構成したものです）

愛沢　伸雄氏

房日新聞 2013 8.9